

Blitzen Times

Vol.103

May.2026



Race Report

2026.4.18	MTB Coupe du Japon 菫蒲谷 XCC
2026.4.19	MTB Coupe du Japon 菫蒲谷 XCO
2026.4.19	JBCF 西日本ロードクラシック
2026.4.26	JBCF 東日本ロードクラシック
2026.5.07-10	ツール・ド・熊野
2026.5.16	JBCF おんたけタイムトライアル
2026.5.17	JBCF おんたけヒルクライム



菖蒲谷で魅せた沢田の連日激走

マウンテンバイクの国内シリーズ、Coupe du Japon 菖蒲谷。

XCCとXCOの2種目に挑んだ沢田時は、シヨートトラックで2位に入り前日悔しさを残しながらも、翌日のXCOで独走優勝を飾った。

栃木でのロードレース2連戦から約2週間。宇都宮清原クリテリウムで岡篤志の勝利をアシストした沢田時は、舞台をマウンテンバイクへ移した。向かった先は兵庫県たつの市・菖蒲谷森林公園特設コース。昨年ここでXCO優勝と全日本タイトルを掴んだ、相性の良い場所だ。

開幕はXCC。スタートループを含む全長約3キロのシヨートレースで、上位8名が翌日のXCOで前列グリッドを得る重要な一戦。

22名が並んだスタートから沢田は3番手で1周目を終え、2周目にペースを上げて副島達海（「Rns Works」）との2人バックを形成する。

後続を振り切り、勝負は早々にマッチレースの様相となったが、告げられた周回数4周。想定より短いレースとなり、プランの修正を迫られた。

最終周回は副島が先頭。沢田は前に出るタイミングを探るが、短いコースとハイペースの中で決定打を打てない。

フィニッシュはスプリント勝負となり、副島が先着。沢田は2位でレースを終えた。

「不完全燃焼」と振り返りつつも、自ら動いて勝負の構図を作り、調子の良さを確かめた一日だった。



翌日は本命のXCO。1周約3キロ×8周、1時間半クワスのフルレースだ。

前日の2位で得たフロントローから後半勝負になる長いレース。自分の力を出し切ると臨む。

警戒するのは副島に加え、松本一成（ホンダカーズ群馬 / Hatching）、竹内遼（MERIDA BIKING TEAM）。だが視線はあくまで自分の走りに向いていた。

主導権を握ったのは松本。沢田は上りでこれに反応し、先頭で難所をクリアする。

やがて松本が後退し、副島との2人バックへ。2周目の上りで沢田が再び踏み、ここで副島が遅れて単独先頭に立つ。

後方から竹内が追い上げ、タイム差が一時縮まる場面もあったがそのたびに上りで踏み直し、差を保った。

レース中盤以降、竹内と高橋翔のセカンドバックが追う展開となるが、ギャップは10〜30秒の範囲で推移。

沢田は得意の上りで時間を稼ぎ、下りはリスクを抑えてまとめる走りを徹底する。

ドラマは残り2周、7周目の下りで起きる。沢田が痛恨の落車。

それでも素早くバイクを起こし、すぐにリスタート。タイム差は詰まりつつあったが、動揺を抑えて自分のペースを取り戻し、独走態勢を維持した。

最終周回も大きなミスなくまとめ、沢田がトップでフィニッシュラインを通過。

前日の悔しさを晴らす優勝であり、「明日勝つて気持ちよく宇都宮に帰りたい」という言葉を現実に変えたレースとなった。

ロードとマウンテンバイク、2つのステージを行き来しながら磨いてきた総合力が、菖蒲谷の森で鮮やかに証明された。

西日本&東日本クラシック 連続表彰台

春のJプロツアーを彩る西日本ロードクラシックと東日本ロードクラシックで、Astemo 宇都宮ブリッツェンは岡篤志が2戦連続で表彰台に上がった。勝利まであと一歩という悔しさも、攻め続けた手応えが同居した2週連続のクラシックを振り返る。

春のシリーズ戦の中でも、西日本・東日本ロードクラシックは特別な存在だ。起伏の多いレイアウトと長い距離が、脚とメンタルを削っていく。チーム力とタフさがそのまま結果に表れる舞台で、Astemo 宇都宮ブリッツェンは2週連続のチャレンジに臨んだ。

第4戦・西日本ロードクラシックの舞台は、兵庫県・播磨中央公園ふじいでんこうサイクリングコース。アップダウンとテクニカルなコーナーが続くコースに6人が並び、現台湾チャンピオンのセルジオ・トゥガがJプロツアー初出走となった。

スタート直後からペースが速く、1周目には谷順成を含む逃げグループが発生。谷が前方で主導権を握り、メイン集団は脚を温存しながら展開を見極める。中盤にかけて逃げは人数を減らしながら粘り、終盤手前でレースは振り出しに戻った。

再び一つになった集団の中で、ブリッツェンは岡篤志、武山晃輔、増田成幸、トゥ、菅野蒼羅の5人を前線に残す。

残り4キロ、トゥがペースを引き上げ、武山が上りでスピードを加速。



岡はライバルの動きを見極めながらフィニッシュへ向けて集中力を高めた。最終局面はスプリント勝負。草場啓吾(KMNA Racing Team)との横一線のスプリントに持ち込むがタイム差0.1秒あまり届かず2位勝利をあと一歩で逃した悔しさと同時に、最後まで人数を残して勝負に絡んだチーム力を示すレースになった。



翌週の第5戦・東日本ロードクラシックは、群馬サイクルスポーツセンター。「心臓破りの坂」とテクニカルな下りを備えた6キロ周回を25周するタフなコースだ。

谷、増田、フォン・チュンカイ、沢田時、岡、武山の6人が、「消耗戦の中でエースを最後まで残す」とをテーマに走り出した。



勝利には届かなかった2つのレースだが、どちらも主導権を握り、最後まで勝負の中心に居続けた。

西日本と東日本で得た手応えと悔しさを糧に、ブリッツェンは次のターゲットとなるステージレースへ歩みを進める。

序盤からアタックが相次ぎ、沢田が積極的にチェック。中盤には谷と岡を含む大きな逃げが形成され、合流を経て先頭は20名超のグループへ。

終盤、先頭グループ内で落車が発生し、レースは一気に緊迫する。混乱を抜けた先で、岡はトマルバ(KMNA Racing Team)、馬場慶三郎(弱虫ハタルサイクリングチーム)らと5人の先頭グループを形成。残り2周、心臓破りの坂でルバが自身のアタックを仕掛け、一気にリードを広げた。

岡たちは追走の立場となり、ローテーションで差を詰めにかかると、ギャップは簡単には埋まらない。それでも岡は最後のスプリントに照準を合わせ、追走グループ内の2位争いを制してフィニッシュ。結果は西日本に続く2位、クラシック2連続で連続表彰台をつかんだ。





STAGE1 印南かえる橋周回コース



STAGE2 古座川清流周回コース



ツール・ド・熊野4日間の総力戦

UCIアジアツアー2.2「ツール・ド・熊野」。印南、古座川、熊野山岳、太地半島と続く4ステージで、Astemo宇都宮ブリッツェンは攻め続けながらも、あと二歩で総合優勝を逃した。それでも、全員完走と最終日の表彰台が、チームの底力と次戦への手応えをくつきりと浮かび上がらせた。

5月初旬、和歌山から三重にかけての熊野地域を舞台に、4日間のステージレース「ツール・ド・熊野」が開幕した。ブリッツェンは、ステージ優勝とUCIポイント、そして個人総合での表彰台。谷順成、増田成幸、沢田時、岡篤志、武山晃輔、宮崎泰史の6人が、その目標に向けてスタートラインに並んだ。

STAGE1 印南かえる橋周回コース

初日の舞台は印南かえる橋周回コース。3級山岳・深山峠と上り基調フィニッシュを備えた12.5・3キロで、スプリントポイントとフィニッシュボーナスが総合争いに直結する。

序盤の中間スプリントでは岡が3位通過で1秒のボーナスタイムを確保。

勝負はラスト1周。各チームが隊列を整える中、ニルス・シンシエク（リーニン・スター）が単独アタック。そのまま逃げ切り、岡はメイン集団スプリントで5位。

STAGE2 古座川清流周回コース

第2ステージは古座川清流周回コース。国の天然記念物「一枚岩」や、極端に狭い山岳路、急勾配の平井峠を抱える12.6・7キロのサバイバルだ。

終盤には宮崎が抜け出し、エリオット・シユルツ（ヴィクトワール広島）らと強力な逃げに合流。やがて2人に絞られた逃げは捕まるが、武山のカウンターアタックからルーク・バンス（ヴィクトワール広島）との逃げも生まれるが、最後の上りで武山がドロップ。ステージはバンスが制し、岡はチェントラブル回避の減速もあり9位にとどまった。

この日だけで34人がリタイアする過酷な展開の中、ブリッツェンは6人全員が完走。



STAGE3 熊野山岳コース

第3ステージ・熊野山岳コースはいわゆるクイーンステージ。棚田千枚田を4回登る107.7キロで総合順位が大きく動く。出走は57人に減り、フルメンバーを揃えるのはブリツェンとKUMANOのみ。岡は総合9位からの逆転を狙う。

序盤の中間スプリントでは武山が積極的に前に出て、総合上位勢にプレッシャーをかける。

最後の千枚田は21人の先頭グループに絞られ、その中に岡と谷が残った。KOMを先頭で越えたニコロガリッポ(TEAM UKYO)が、その後のアップダウンでパリスと2人の先行態勢を築き、逃げ切り勝利。

岡は22秒差の12位でフィニッシュし、総合順位を8位まで押し上げるにとどまった。

STAGE4 太地半島周回コース

最終ステージは太地半島周回コース。太地港からの上りと急な下りヘアピンを含む10・5キロ×9周の104.3キロだ。総合はパリス、シンシエック、ガリッポが1分以内で並び、岡は48秒差の8位。「まだ届く位置」からのラストチャレンジとなった。

ブリツェンは序盤から積極策を選択。沢田がアタックを繰り返して、6人逃げを形成する。中間スプリントでは沢田が上位通過を重ね、総合上位勢にボーナスタイムを与えない動きで岡をアシストした。

ラストラップ、ここで仕掛けたのが総合3位シンシエック。総合上位同士の激しい駆け引きの中、シンシエックが逃げ切ってステージ優勝と総合2位を手にした。

メイン集団はスプリントとなり、岡がアンドレア・ダマト(TEAM UKYO)に続く3位でフィニッシュ。この大会唯一の表彰台を掴み、日本人トップの総合6位で4日間を締めくくった。

ツアー・オブ・ジャパン、全日本選手権へと続く後半戦に向けて、この4日間の悔しさと手心えは、チームを前へ押す強い原動力になる。

おんたけTT表彰台独占と 宮崎2日連続表彰台

ツール・ド・熊野から中1週、舞台は長野県王滝村・御嶽山麓へ。おんたけタイムトライアルで Astemo 宇都宮ブリツェンはワンツースリーを達成し、翌日のヒルクライムでは宮崎泰史が3位表彰台、谷順成が4位と山岳力を示した。ツアー・オブ・ジャパンへ続く「上り」と「個人力」を試す2連戦、その手応えを振り返る。

5月中旬、ツール・ド・熊野の疲労が抜けきらないまま、Jプロツアーは舞台を長野県木曽郡王滝村へ移した。

御嶽湖畔とヒルクライムコースを使った2連戦、おんたけタイムトライアルとおんたけヒルクライム。いずれもツアー・オブ・ジャパンの富士山ステージを見据えるうえで、上りの仕上がりを測る重要な機会だった。

第6戦おんたけタイムトライアル —TTス。ペシャリストのチーム力

初日は1周16キロのコースを2周する全長32キロの個人タイムトライアル。

御嶽湖南岸の松原スポーツ公園近傍を発着とし、折り返し区間には緩やかな上りが計4回現れる、パワーとペーシング能力が試されるレイアウトだ。

出場は谷順成、フォン・チュンカイ、岡篤志、宮崎泰史、セルジオ・トゥ、菅野蒼輝。

岡はこの時点でJプロツアー個人ランキング3位。

上位2人が不出走のため、この2連戦次第でライダーシャーシ獲得も見える状況だった。

ブリツェンは、第2ヒートに宮崎・トゥ・フォン、第3ヒートに菅野・谷・岡という布陣で臨む。

宮崎は全日本選手権タイムトライアル2位の実績を持ち、トゥは台湾TTチャンピオンかつアジア選手権銅メダリスト。岡もロードオールラウンダーとしてTT能力が高く、自分との戦いになるが、ライダーシャーシ獲得も視野に入れる」と意気込みを語っていた。

基準タイムを作ったのは、第1ヒートで39分44秒91を叩き出した山本大喜（C/FUKUOKA）。

しかし、第2ヒートでそのタイムを書き換えたのが宮崎だ。39分24秒68でトップに躍り出ると、続くトゥが38分47秒47まで更新。フォンも健闘して40分38秒64でまとめ、上位陣にプレッシャーをかける。

第3ヒートの選手たちが走り終えても、トゥと宮崎のタイムはなかなか破られない。

菅野は41分47秒97、谷は40分52秒84でフィニッシュ

し、安定した走りを見せる。残るのは岡。レース前は「自信は高くない」と話していたが、折り返しで監督からトゥとの差を聞かされるとギアを一段上げる。結果は39分37秒24。山本のタイムを上回りながらも、宮崎には届かず3位に滑り込んだ。

最終的なりザルトは、トゥ1位、宮崎2位、岡3位の表彰台独占。トゥの平均速度は49.49km/hと過去の優勝タイムに迫る数字を記録した。

この結果で岡はJプロツアーランキングトップに浮上し、赤いライダーシャーシを手にする。

「チーム内の争いに負けて悔しさもあるけれど、ワンツースリーという最高の結果」と岡。

TTスベシャリストが揃ったブリツェンの強みが、数字と結果として形になった一日だった。



第7戦おんたけヒルクライム ― 山で試した富士山への脚

翌日は、御嶽湖南岸の松原スポーツ公園から標高2180メートルの田ノ原まで上る24キロのヒルクライム。

獲得標高は約1290メートル、最大勾配7.9%。序盤から中盤にかけては比較的緩やかな勾配が続き、終盤になるほど斜度が上がる典型的な「後半勝負」のコースだ。

ブリッツェンからは前日と同じ6名が出走。ヒルクライム適性の高い谷と宮崎に自然と期待が集まった。

レース前、谷は「昨日のTTでチームはワンツースリー。自分もヒルクライムでしっかりと活躍したい」と語り、終盤の勾配変化を意識したペースコントロールをイメージしていた。

宮崎も「コンディションは万全ではないが、コースとの相性は悪くない。無理をしすぎず上位を目指す」とコメント。

ツアー・オブ・ジャパン富士山ステージを見据え、ここで自分の登坂力を測りたいという思いは共通していた。

スタート直後はバレード走行を含む5キロを経てリアルスタートへ。

序盤はフォアが先頭に出て一定のテンポで集団をコントロールし、エース陣を風から守る。

じわじわと勾配が増す中盤に入ると、各チームがペースアップを図り、ドロップする選手が増えていく。

宮崎や谷、VCFKUOKA勢を中心とした約10名の先頭グループが形成され、岡は少し後方の追走グループで粘る展開になる。

先頭では何度もアタックがかかるが、決定的な抜け出しは生まれない膠着状態が続く。レースが大きく動いたのは残り約2キロ。宮崎が先頭から仕掛け、勝負のスイッチを入れる。

ここにベンジャミン・ブラス（MCFUKUOKA）が鋭く反応し、そのままカウンター気味に先行。

宮崎は追走に入るが、ブラスのチームメイトであるシエラルド・レデスマがチェックに入り、宮崎は単独でギャップを埋めざるを得ない状況に追い込まれる。

ブラスはそのまま踏み切り優勝。2位にはレデスマが入り、MCFUKUOKAがワンツーフィニッシュ。

宮崎はトップから28秒差で3位表彰台を確保し、自ら仕掛けたレースで結果を掴んだ。

谷も後方からのスプリントで4位に食い込み、中盤での粘りが効いた岡は8位でフィニッシュ。

菅野は38位、トウは49位、序盤で集団を引いたフォンも60位で登り切り、全員が完走を果たした。

前日にTT表彰台独占、この日は宮崎がヒルクライム表彰台を獲得し、谷と岡もトップ10入り。

順位だけ見れば「勝利には届かなかった」2日間だが、タイムトライアルとヒルクライムの両方でチームの強みと課題が浮き彫りになった。

宮崎は「熊野からの疲労はあったがTOJに向けて良いトレーニングになった」と振り返り、岡も「ここからシーズンを通してリーダーシップを守りたい」と意気込みを新たにしている。



